

鹿島清三郎著『The Ainu of Japan』について

—2025年度新収蔵資料の紹介をかねて—

大坂 拓・小川正人

- 目次
- 1 はじめに
 - 2 資料の概要
 - 3 若干の考察
 - 4 まとめにかえて

Key Words

アイヌ研究史 (History of Ainu Studies)、アイヌを写した写真の歴史 (History of Ainu Photography)、鹿島清三郎 (Kajima Seizaburou)、玄鹿館 (Genroku-kan)、ペンリウク (Penriuk)

1 はじめに

(1) はじめに

本稿では、北海道博物館が2025（令和7）年度に寄贈を受け入れた資料のうち、東京京橋区木挽町（現在の東京都中央区銀座）に所在した玄鹿館が1895（明治28）年9月30日付で発行した写真集『The Ainu of Japan』（以下では寄贈資料単体について言及する際には「本資料」、刊行物として言及する際には「本書」とする）について、その概要を紹介する。

1867（慶応3）年7月に箱館に入港していたイギリス軍艦サーベント号の乗員フレドリック・ウィリアム・サットンが、石狩川流域から同地を訪れていたアイヌの一人を撮影したのを嚆矢として、アイヌを被写体とする写真が数多く撮影され、写真集、写真絵葉書など多様な形態で流通した（大坂2025）。しかし、そうした刊行物の多くは発行の経緯や素材となった写真の撮影年代・撮影地が不明瞭であり、基礎的な情報の整備が当面の最重要課題となっている。筆者らはこうした問題意識にもとづき、これまで当館に寄贈された関連資料の整理・公開を進めてきており（小川・大坂2018；大坂・小川2020；ほか）、本稿はそうした一連の作業のひとつである⁽¹⁾。

なお、本書に収録されている写真のなかには、明らかに被写体個人およびアイヌ民族の尊厳を損なうものが含まれているため、掲載にあたっては一部を加工する措置

をとった。また、写真に付された解説文にはアイヌ民族に対する人種的偏見が強く滲んでおり、十分な批判的検討を加えることなしに全文を翻刻・掲載することは、かえって弊害が大きいと考えた。そこで本稿では、解説文については一部を抜粋し、今後の検討課題として言及するに留めた。

本稿は1（2）を小川、1（1）・（3）、2、3、4を大坂が執筆し、全体について両者が協議のうえ取りまとめた。

(2) 資料受け入れの経緯

本資料は、2025（令和7）年9月に、筆者の一人である小川の知人—大学の一年先輩にあたる一手嶋和之氏から寄贈の打診をいただき、重要かつ稀覯な文献であることから、この申し出を有り難くいただくこととし、同年12月12日開催の資料審査会に諮り、受け入れが承認されたものである（資料番号：194382）。

手嶋氏によれば、本資料は手嶋氏の義父である故・品田安治氏（1932～2025）の旧蔵書である。同氏は小樽市の出身で、1960年代まで道内で暮らし、その後道外に転居したが、この本は小樽居住時代に入手したのではないかと推察される。具体的にどこでどのようにして入手されたのか、その経緯等は不明であるが、品田氏は他にも北海道の郷土史関係の文献を持っておられたと伺ったこと、アイヌ史やアイヌ文化への関心があったことだったと推察される。寄贈いただいた時点での本資料は、およそ130年前の出版であるがたいへん良好な

大坂 拓：北海道博物館 アイヌ民族文化研究センター
小川正人：北海道博物館 アイヌ民族文化研究センター

(1) こうした研究はともすれば、写真を撮影し、印刷物として流通させた側、及びそれを消費した側に関する検討に留まりがちである。そうした側面の重要性は当然のこととしたうえで、被写体とされた側のアイヌの歴史に接近する資料として捉え返す視野を切り拓こうとする意識的な取り組みが重要と考えている。

保存状態であった。

本資料は公刊された図書であり、一般的に考えれば図書資料として登録することもありえた（実際、本書を所蔵する公的資料保存機関の多くは図書館である）が、本書が古い文献であることに加え、前節でも触れたように、また、これまでも指摘されている⁽²⁾とおり、本書には当時の日本社会における人種差別的な意識が強く反映されており、本文及び写真の取り扱いにはこのような問題を意識し慎重を期す姿勢が求められると判断し、収蔵資料として登録することとした⁽³⁾。

(3) 先行研究

本書については、伊藤逸平『日本写真発達史』（伊藤 1975：56-59）など、写真史の分野でいくつかの言及がある。

アイヌ史・アイヌ文化研究の文脈では、北海道史・対アイヌ政策史研究者の高倉新一郎が、1953（昭和28）年に刊行した論考「蝦夷風俗画に就て」において、「明治中期以後特に目立って発達したアイヌの風俗写真」について一節を設け、「所謂風俗資料としての写真集と絵葉書集」の代表的事例として本書に言及している。高倉は本書掲載写真の撮影地について「石狩対雁と日高の平取らしい」との推定を示したうえで、「対雁のアイヌは明治九年樺太から移したもので、北海道平取のアイヌとは文化的な差異が大きいにも関わらず、「混同してゐるのは惜い」としつつ、画像が極めて鮮明であること、資料が乏しい当時の樺太アイヌの姿を捉えたものとして極めて重要な資料と評価した（高倉 1953：62-63）。

近年では、2020年に考古学・アイヌ文化研究者の森岡健治が、国立映画アーカイブにおける講演で英国映画協会が所蔵する映像『日本のアイヌ』（The Ainu of Japan）の対比資料の一つとして本書掲載写真1点を取り上げ、1895（明治28）年に「ペンリウク宅前で撮影されたもの」としている（森岡 2021：4）⁽⁵⁾。

また最近では、写真研究者の中村絵美が、1968年に日本写真家協会が主催した展覧会『写真百年 日本人による写真表現の歴史』、および同展覧会をもとにしたという『日本写真史：1840-1945』に掲載されたアイヌ関

連写真を検討するなかで、本書に言及している⁽⁶⁾。中村は本書掲載写真について撮影者が不明確であることを指摘するとともに、人種差別的な内容を多く含み、「決してリアリスティックな記録写真ということは出来ない」ものとの評価を示している（中村 2025：13）。

2 本書の概要

(1) 本書の構成

本資料については、北海道大学附属図書館所蔵版⁽⁷⁾との対照をおこない、両者の内容に異動が無いことを確認した。

本書は表紙と裏表紙、中表紙、前書き（Introduction）、図版目次（List of Plates）、写真22点と解説文13点、奥付から構成されている（図1・表1）。写真にはそれぞれ、半透明の薄紙に図版目次と同一の内容が印字されたものが挟み込まれている（図1-4）。本稿では、この記載を各写真下に転記した。

(2) 本書の内容

本書掲載写真は概ね、家屋（図2-1～3）、人物（図2-4～図5-2）、景観（図5-3～図6）、神社及び神像（図7）の順に配列されている。

前書き及び解説文は概説的な内容が大部分を占め、撮影地などに関わる情報は次節で詳述するようにごくわずかである。前書きの冒頭では、アイヌについて、かつて日本全域に居住していたが、日本人（和人）によって北に追いやられた人々であるとの認識が示されている⁽⁸⁾。解説文では、和人は「知的で勤勉な日本人」（intelligent and industrious Japanese）とされる一方で、アイヌは文字を持たず、「野蛮」で、進歩せず、一方で狂暴ではなく素朴で親切な存在として表象されている。

また、アイヌの形質的特徴に関しては執拗な記述が加えられ、女性の刺青などの文化は否定され、執筆者が初めてアイヌを目にしたときに「男女の区別ができなかった」とまで記されている。

こうした記述は今日的には、本書が刊行された当時、アイヌを取り巻いていた人種的偏見・人種差別の実態を

(2) 例えば近年では、中村絵美が本書には「当時の人種差別的な考えが反映されている」とし、研究発表の際にも、本書の一部について敢えて「今回直接引用はしない」との姿勢をとられている（北海道立北方民族博物館シンポジウム、2024年10月、中村 2025）。

(3) 収蔵資料として登録することにより、資料として公開するけれども、閲覧等の利用には事前に申請をいただくことになる。

(4) 日露間で締結された樺太千島交換条約の締結により、樺太アイヌの一部841人が北海道北部宗谷地方への移転を余儀なくされたのは、実際には1875（明治8）年であり、翌1876（明治9）年に札幌郡対雁村（現在の江別市対雁）への再移転が黒田清隆の主導により強行されている。

(5) 森岡が言及した写真は本稿図3-2。なお、森岡は撮影年を刊行年と同一と見なすことについて具体的な論証をおこなっているわけではない。

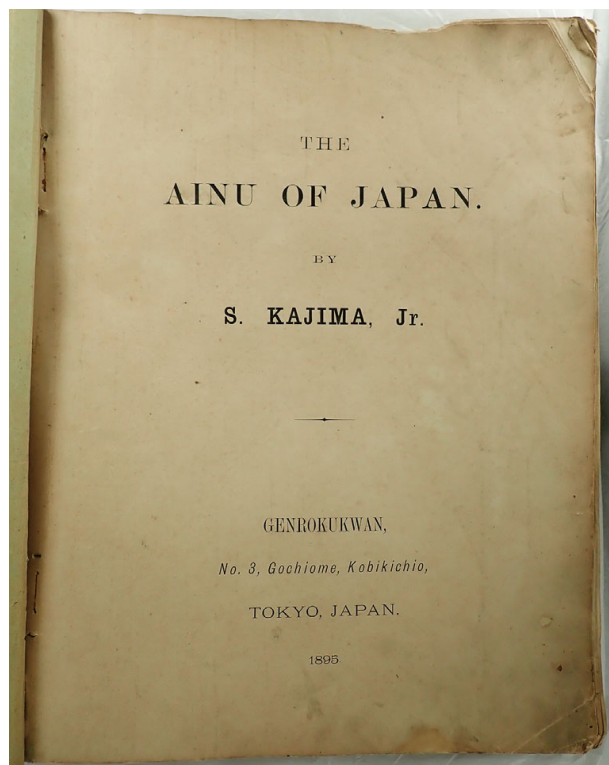
(6) 中村が言及した写真は本稿図4-1。

(7) 同館請求記号：別ア915.1-K12（北大北方資料室）。この資料は綴紐を解いて修復・複製本がなされており、一部にセロハンテープによる補修もあるものの、その他は折れや染み、経年による変色も少なく、保存状態は概ね良好である。

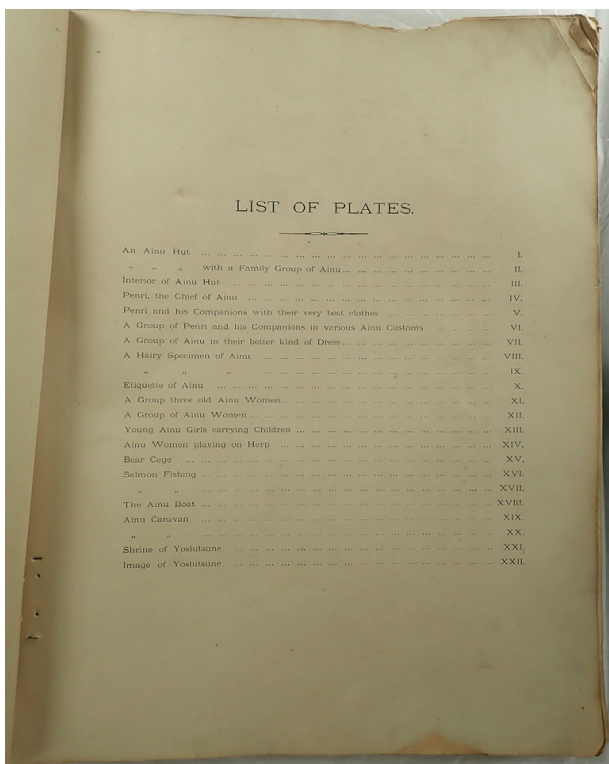
(8) 該当部分の原文は以下の通り。The Ainu are a primitive people, who have once occupied the whole or nearly the whole of the country known as Japan. Now only a few thousands of them are left and these have been driven northward by the present Japanese race, till they have no home left within the boundaries of the main island but are to be found in what now is called Hokkaidō and farther north to Kabafuto, now a part of Russia.



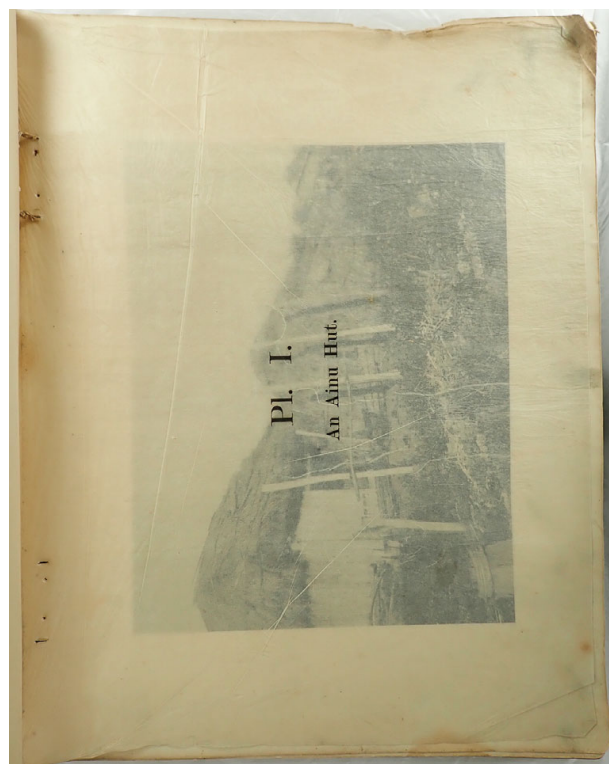
1 表紙



2 中表紙

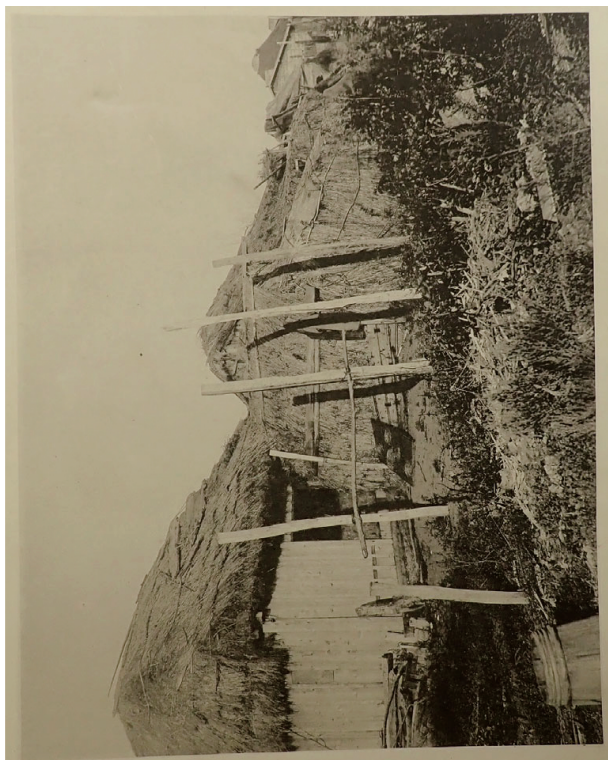


3 目次

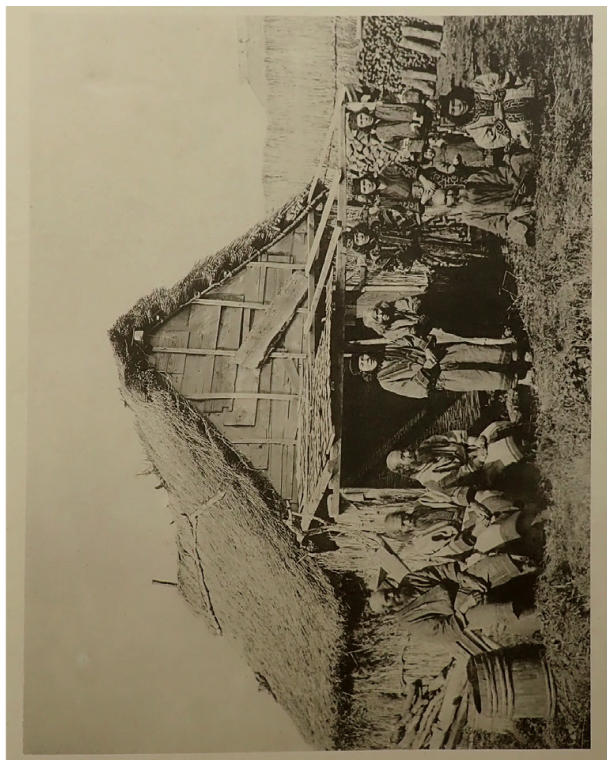


4 写真名称記載の例 (Pl. I)

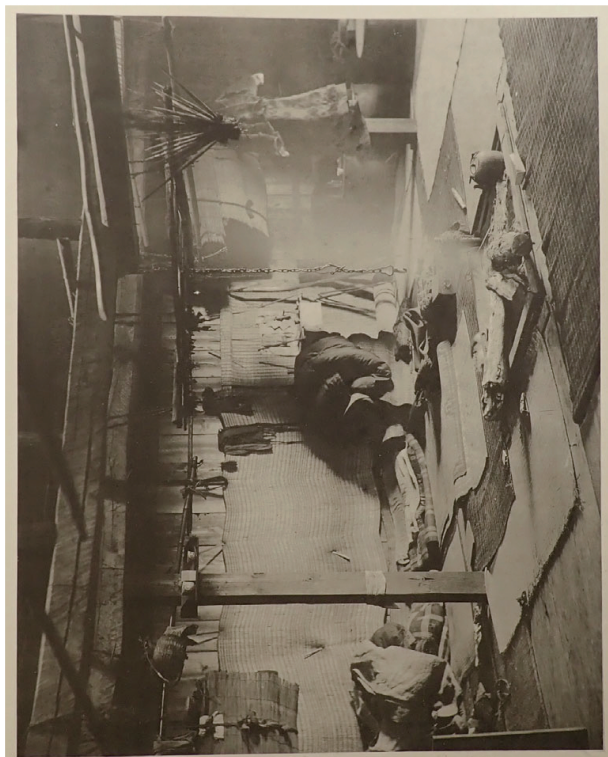
図1 資料の体裁



1 “Pl. I. An AINU Hut.”



2 “Pl. II. An AINU Hut with a Family Group of AINU.”



3 “Pl. III. Interior of AINU Hut.”

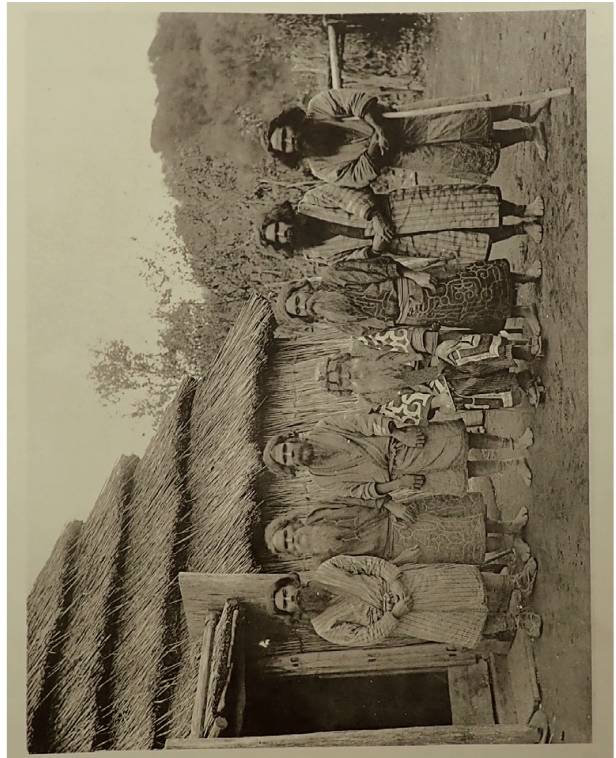


4 “Pl. IV. Penri, the Chief of AINU.”

図2 Pl. I～IV



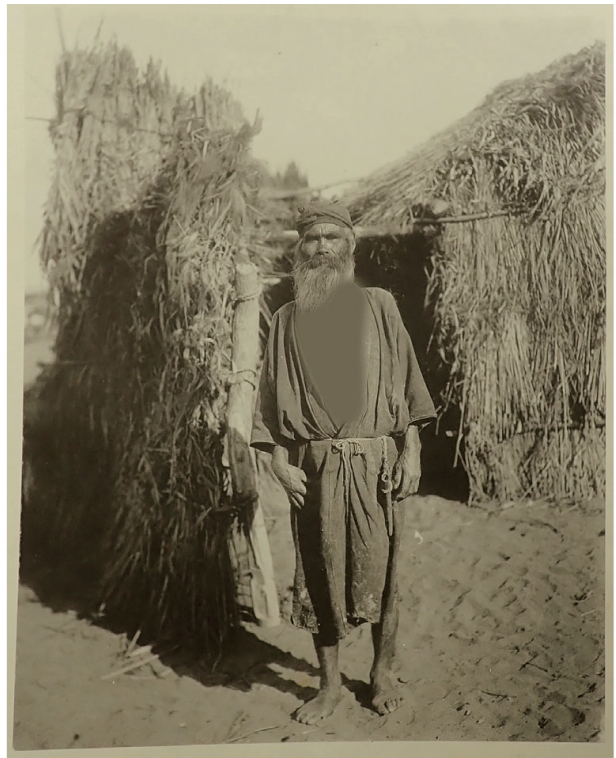
1 “Pl. V. Penri and his Companions with the very best clothes.”



2 “Pl. VI. A Group of Penri and his Companions in various Ainu Customs.”

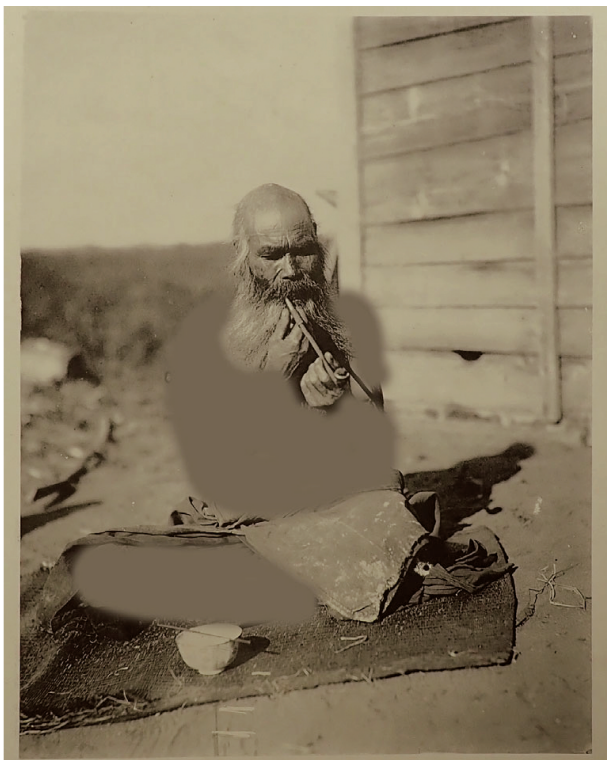


3 “Pl. VII. A Group of Ainu in their better kind of Dress.”



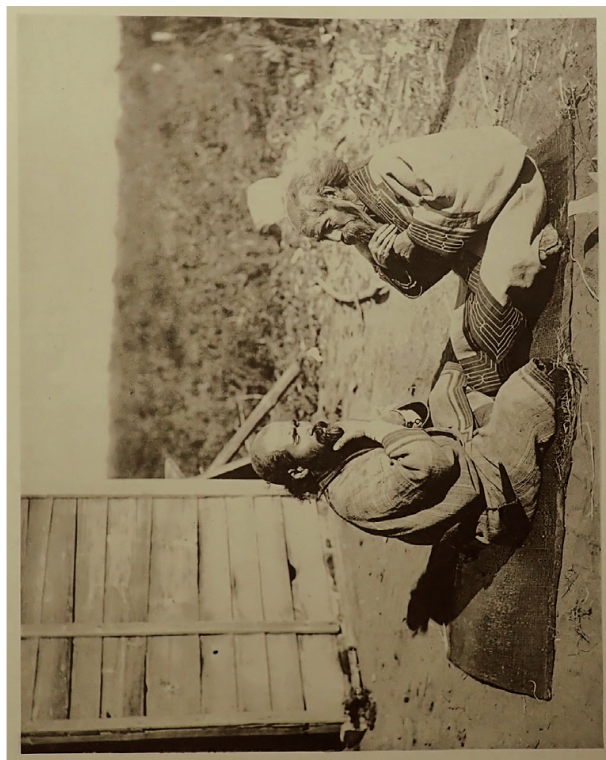
4 “Pl. VIII. A Hairy Specimen of Ainu.”

※本資料は被写体の尊厳を著しく損なうものと考えられるため、掲載にあたって画像を加工している。なお、資料名も同様にアイヌ民族に対する民族的偏見がとりわけ色濃く表出しているが、歴史的資料としての性格に鑑みそのまま転記した。



1 “Pl. IX. A Hairy Specimen of Ainu.”

※本資料は被写体の尊厳を著しく損なうものと考えられるため、掲載にあたって画像を加工している。なお、資料名も同様にアイヌ民族に対する民族的偏見がとりわけ色濃く表出しているが、歴史的資料としての性格に鑑みそのまま転記した。



2 “Pl. X. Etiquette of Ainu.”



3 “Pl. XI. A Group three Ainu women.”

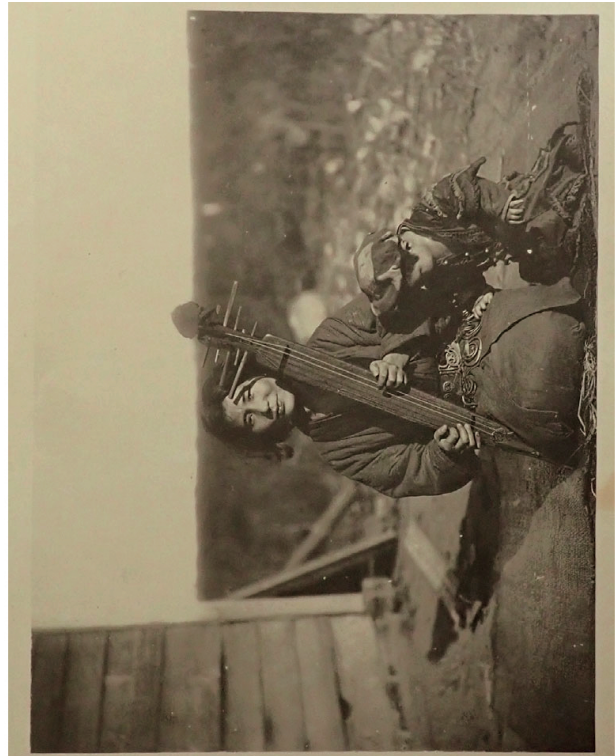


4 “Pl. XII. A Group of Ainu women.”

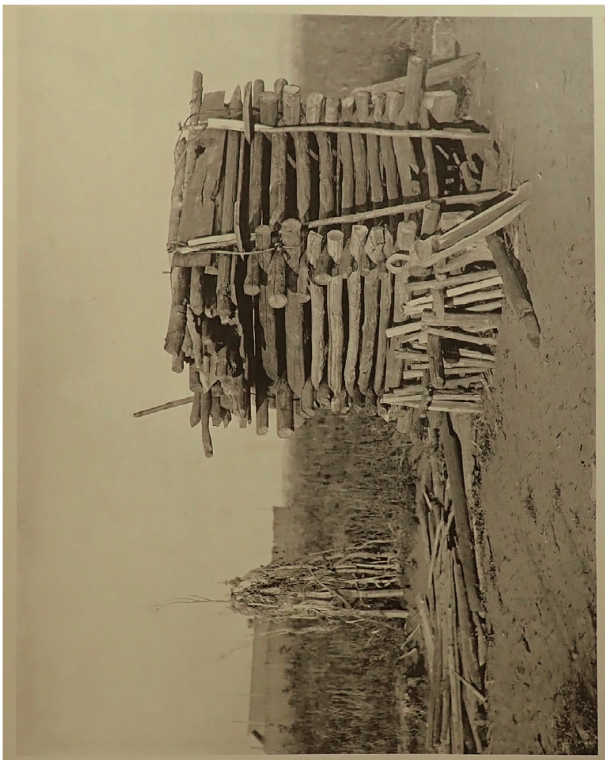
図4 Pl. IX～XII



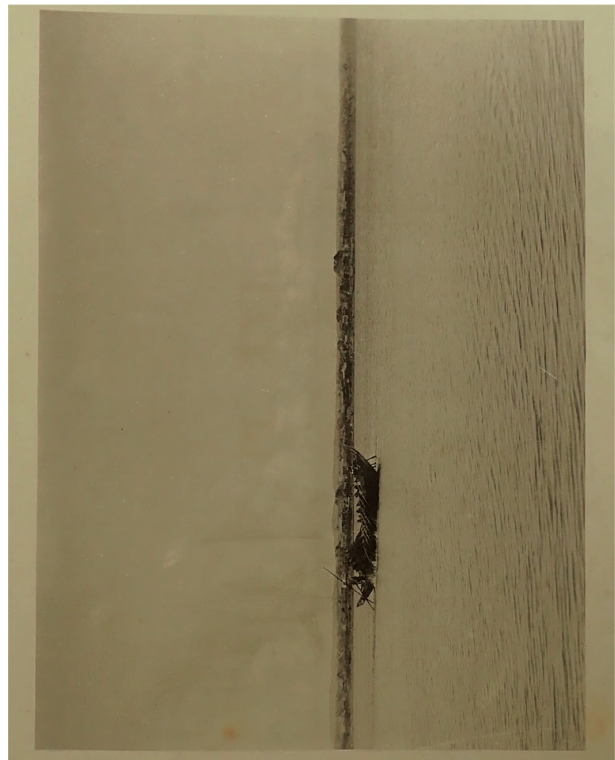
1 “Pl. XIII. Young Ainu Girls carrying Children.”



2 “Pl. XIV. Ainu women playing on Harp.”

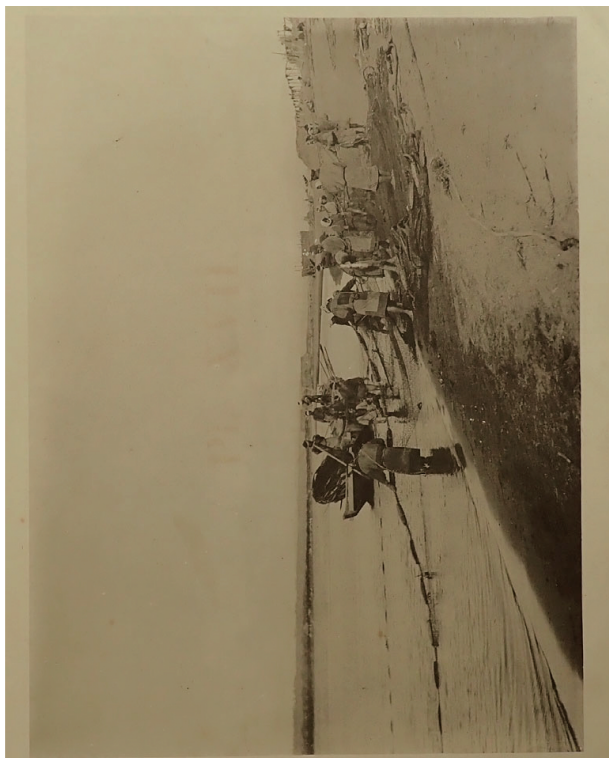


3 “Pl. XV. Bear Cage.”

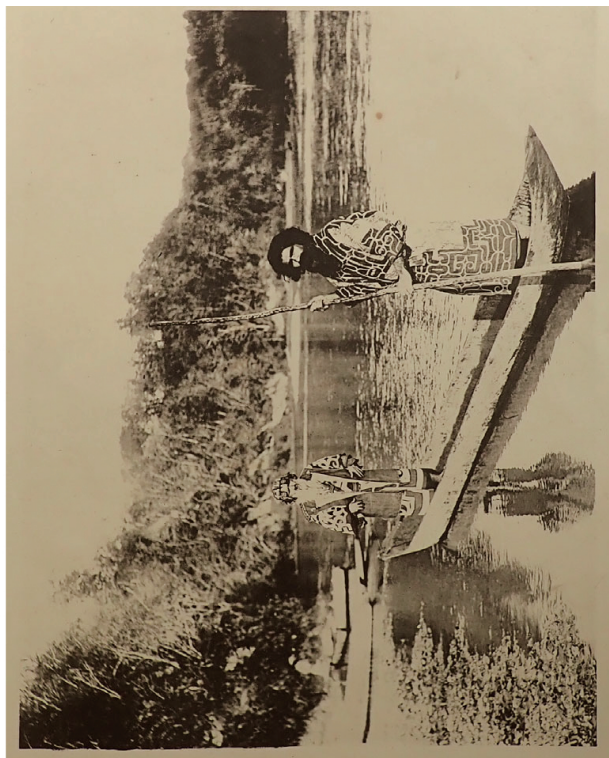


4 “Pl. XVI. Salmon Fishing.”

図 5 Pl. XIII ~ XVI



1 “Pl. XVII. Salmon Fishing.”



2 “Pl. XVIII. The Ainu Boat.”



3 “Pl. XIX. Ainu Caravan.”



4 “Pl. XX. Ainu Caravan.”

図6 Pl. XVII ~ XX



1 “Pl. XXI. Shrine of Yoshitsune.”



2 “Pl. XXII. Image of Yoshitsune.”

図7 Pl. XXI ~ XXII

表 本書の構成

番号	概要	特記事項	図版番号
1	表紙		図 1-1
2	中表紙		図 1-2
3	前書		
4	目次		図 1-3
5	Pl.I・II 解説		
6	Pl.I.		図 2-1
7	Pl.II.		図 2-2
8	Pl.III 解説	Pl.I に写る家屋の内部であることを記載。	
9	Pl.III.		図 2-3
10	Pl.IV ~ VII 解説	被写体の男性が Piratori の Penri であることを記載。	
11	Pl.IV.		図 2-4
12	Pl.V.		図 3-1
13	アイヌの衣服に関する解説		
14	Pl.VI.		図 3-2
15	Pl.VII.		図 3-3
16	Pl.VIII・IX 解説		
17	Pl.VIII.		図 3-4
18	Pl.IX.		図 4-1
19	Pl.X 解説		
20	Pl.X.		図 4-2
21	Pl.XI・XII 解説		
22	Pl.XI.		図 4-3

番号	概要	特記事項	図版番号
23	Pl.XII.		図 4-4
24	Pl.XIII・XIV 解説		
25	Pl.XIII.		図 5-1
26	Pl.XIV.		図 5-2
27	Pl.XV 解説		
28	Pl.XV.		図 5-3
29	Pl.XVI・XVII 解説		
30	Pl.XVI.		図 5-4
31	Pl.XVII.		図 6-1
32	Pl.XVIII 解説		
33	Pl.XVIII.		図 6-2
34	Pl.XIX・XX 解説		
35	Pl.XIX.		図 6-3
36	Pl.XX.		図 6-4
37	Pl.XXI・XXII 解説	Pl.XXI・XXII が Piratori の神社であることを記載。	
38	Pl.XXI.		図 7-1
39	Pl.XXII.		図 7-2
40	奥付		
41	裏表紙		



1 “Pl. V. (図 3-1)”



2 “Pl. XI. (図 4-3)”



3 “Pl. XIII. (図 5-1)”

図 8 同一地点で撮影された写真 (1)



1 “Pl. XVIII. (図 6-2)”



2 “Pl. XIX. (図 6-3 左右反転)”

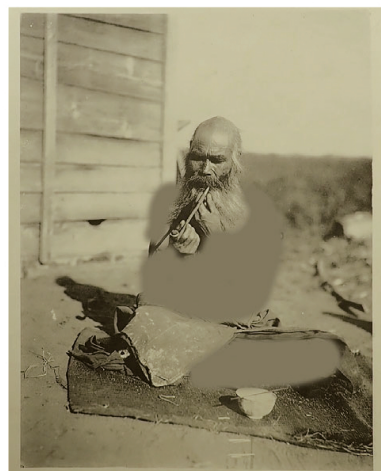
図 9 同一地点で撮影された写真 (2)



1 “Pl. X. (図 4-2 部分)”



2 “Pl. XIV. (図 5-2 部分)”



3 “Pl. IX. (図 4-1 左右反転)”

図 10 同一地点で撮影された写真 (3)

示す同時代資料として取り扱うべきであろう。

3 若干の考察

(1) 写真の撮影地の特定

沙流郡平取村で撮影された一群

図 2-4・図 3-1・2 には写真名称に Penri という人名が記載されており、解説文“Ainu Men.(Pl. IV to VII.)”にも、この人物について The chief of Ainu, whose name is Penri of Piratori との記載がある。これまで数多くの刊行物で引用されてきたとおり（金田一 1933；1944 ほか）、この男性は近代初頭における日高国沙流郡のアイヌのリーダーの一人として著名な、平取村（現：沙流郡平取町本町）の平村ペンリウク [Penriuk] (1832-1903) と判断してよい。人名は明記されていないものの、図 6-2 で舟の後方に立つ男性、図 7-1 で祠の前に立つ人物も同一人物であろう。

図 7-1・2 については、解説文“Image of Yoshitsune. (Pl. XXI & XXII.)”に、平取村の崖の上に九郎判官義経を祀った祠があり、1 はその祠を、2 はその中に祀られた神像を写したものと一文がある。この記述は、同村の義経神社とそこに祀られた義経像を指している。

この他に、ペンリウクが写る写真を鍵とすることで、図 3-1 と同一地点で撮影された図 4-3、図 5-1、図 6-2 と同一地点で撮影された図 6-3 も、平取村周辺で撮影されたものと推定することができる（図 8・9）。

石狩郡で撮影された一群

図 4-1 は、図 4-2、図 5-2 と構図が一致しており、連続して撮影されたものであることは明らかである（図 10）。これらに写る人物を鍵として残る写真を確認すると、図 4-1 の人物は図 3-4 と同一であり、図 4-2 の 2 名は図 2-1 の前列左から 2・3 人目、及び図 3-3 の前列 2 名と同一である。いずれも全く同じ服装であることから、これらも短い時間に連続して撮影されたものであろう。

写真名称や解説文にはこれらの撮影地は明記されていないものの、図 3-4 の人物は 1898（明治 31）年に刊行された雑誌『太陽』第 4 巻第 3 号に「石狩アイノ集合」として掲載された写真に写る人物と同一とみられる。衣服の文様も樺太アイヌの特徴を示していることから、この一群の写真については、1876（明治 9）年から 20 世紀初頭まで石狩川河口付近に居住していた樺太アイヌである可能性が高い。

また、図 2-3 で家屋内の炉に立つ木幣、及び図 5-3 で熊檻横の祭壇に立つ木幣はいずれも樺太アイヌに特徴的な形態であることから、解説文で図 2-3 に写る家屋の外観とされた図 2-1 とともに、同地で撮影されたものと推定できる。

その他

図 4-4 は、海岸の砂丘上で板綴舟 [itaomacip] を囲んで 5 人の若い女性が座るものである。左から二人目の女性の着用する着物の文様は北海道太平洋沿岸地域の特徴を示しており、沙流川河口付近の海岸線の可能性も考えたが、撮影地の特定には至らなかった。

図 5-4・図 6-1 については、解説文“Salmon Fishing. (Pl. XVI & XVII.)”で石狩川について言及があるものの、北海道最大の鮭漁場として地名を挙げたものであり、撮影地を明記したものではない。写真背後に写る山並みも不鮮明であり、今回は厳密な照合はできなかった。

図 6-4 は、岩を掘り抜いた隧道の前に並ぶ、馬に跨った 3 人の男性である。背後の隧道の奥には海岸線らしきものが見える。この写真は、1900（明治 33）年に刊行された『日本之名勝』に「(北海道) 室蘭港に於けるアイノ乗馬の景」として転載されている（瀬川編 1900）。撮影地点は『新室蘭市史 第五巻』掲載の「茶津岬先端のトンネル」（室蘭市史編さん委員会編 1989：315）にあたるものと推定される⁽⁹⁾。

(2) 写真の撮影者及び撮影年代について

本書の奥付には、「著者兼発行者」として鹿島清三郎の名が記されている。ただし、この記載を以って鹿島を写真の撮影者、及び解説文の執筆者と見なすことが可能か否かについては、中村が指摘したとおり一定の留保が必要であろう。

鹿島清三郎は、近世江戸の下り酒問屋鹿島家の養子で近代初頭の写真愛好家として著名な鹿島清兵衛の弟にあたる。玄鹿館は清兵衛が 1895（明治 28）年 2 月に弟の名義で開いたものとされるが⁽¹⁰⁾、清三郎は単なる名義人ではなく、本人も写真撮影の技術にも熟達していたとされる⁽¹¹⁾。

本書の刊行と同じ 1895（明治 28）年 9 月に大日本写真品評会が発行した『写真雑誌』第 8 号には、同年 7 月 23 日に開催された「大日本写真品評会第 10 回常会」 「東京本部出品」の項に、鹿島清三郎を出品者とする「アイノ室内」、「アイノ喫煙」の 2 点が記載されている⁽¹²⁾。これらは名称からみて、前者が図 2-3、後者が図 4-1 に

(9) この点については新妻達雄氏より関連文献の御教示を賜ったことを明記し、記して感謝申し上げます。

(10) 「今回木挽町五丁目に玄鹿館と稱する寫真場を開き令弟清三郎氏を其館主とし」『東洋学芸雑誌』12 (161) 東京社。

(11) 「館主鹿島清三郎君最も術衛に熟達し、鹿島清兵衛君自ら業務を監督し、亦技師悉く其人を得たれば」『写真雑誌』(5) 大日本写真品評会。

あたる可能性がある。本書掲載写真のうち少なくとも石狩で撮影されたものについては、清三郎本人が撮影に関与していた可能性は低いのではないだろう。

本書掲載写真が撮影された年代については、刊行年は下限を示すに過ぎず、異なる角度からの検証が必要である。函館市中央図書館が所蔵する絵葉書『アイヌ—土俗エハガキ 第一輯 NAG NIPPON AINU GAKKWAJ』⁽¹³⁾には、「石狩へ転住中の樺太アイヌ」として図2-2が転載されている。この絵葉書の解説文には、「明治八年樺太が露領となつた時、その南岸一帯のアイヌ八百余人日本へ帰化して石狩に転住す、其残存者ちりぢりに樺太へ戻つて今は一人も居ないが、明治二十一年頃隅々鹿島清兵衛氏の手に其隻影を止めたのが此図で、土俗的に體質的に之は頗る貴重な資料である」(下線筆者)と記されている。

発行元として記されたNIPPON AINU GAKKWAJは、アイヌに強い関心を寄せていた小田切剣二が主宰した日本阿夷奴学会(直後に日本アイヌ学会に改称)である。1917(大正6)年10月に発行された同会の会誌『アイヌ研究』第一巻第三号巻末には、「アイヌ土俗エハガキ 第一輯三枚一組が「新春早々発売予定」されるとの告知が掲載されており、そのうち一枚の名称は「石狩へ転住中の樺太アイヌ」とされている。翌1918(大正7)年5月に刊行された第四巻には関連する記載はないため、正確な発行年月日は不明ながら、相前後して発行されたものであろう。ただし、小田切がこの絵葉書の作成にあたって、写真の撮影年代を1888(明治21)年頃とした根拠は現状では不明である。

本書掲載写真の撮影年を絞り込むためには、引き続きさまざまな刊行物に転載された事例を集成して年代の上限を追求するとともに、関係記録を一つひとつ確認する努力を積み重ねていく必要がある。

4 まとめにかえて

本稿の結論をまとめると、以下のようになる。

- (1) 写真集『The Ainu of Japan』に掲載された写真22点のうち、撮影地が特定できたものは沙流郡平取村(10点)、石狩郡(8点)、室蘭郡(1点)の計19点であり、残る3点の撮影地は特定に至らなかった。
- (2) 掲載された写真の詳細な撮影年代は、特定に至らなかった。

本書は前書き(Introduction)で、アイヌは北海道に住む「日本のアイヌ」(Ainu of Japan)とロシア領に居住する「樺太のアイヌ」(Kabafuto-Ainu)に区分されると述べたうえで、「本書で取り扱うのは前者に限られる」との認識を示している。早くに高倉が指摘している通り、本書には実際は1875(明治8)年の樺太千島交換条約締結により日本領への移住を余儀なくされ、石狩郡に居住していた樺太アイヌの人々を被写体としたものが数多く掲載されているにも関わらず、その点を峻別する意識は全く看取できない。両者を「混同してある」という高倉の指摘は妥当である。

そうした限界を有するとはいえ、アイヌを被写体とする1890年代以前に遡るまとまった写真資料は、開拓使が撮影した札幌周辺事例(大坂2022ほか)、田本研造が撮影した噴火湾～登別の事例(大坂2024・2025)、ヒッチコックが撮影した道東・千島アイヌのもの(宇仁2015)などを除けば決して多くはない。この傾向は、アイヌ人口が多く、研究者・旅行者が頻繁に訪れたことで知られる沙流川流域にも当てはまり、撮影年代・場所が正確に把握できるのは、1903(明治36)年のプロニスワフ・ピウスツキ、1909(明治42)年のアーノルド・ゲンテによるものなど、20世紀前半のものが大半を占めている。本書に掲載された写真は、確実にそれらを遡る時期の様相を記録したのものとして、極めて重要な意味を持つことは間違いない。

ただし、その重要性は、これまで人類学者がしばしば強調し、執着してきたような、より古いが故に「同化」以前の「純粹」な姿を記録しているからではなく、大きな変容を被りながら続いてきたアイヌ史のなかに存在する資料的空白を埋めるものとしての価値である。その前提の上で今後、本書掲載写真についてさまざまな方向からの分析が加えられるべきであろう。

謝辞

本稿をまとめるにあたり、本書を大切に保管されてきた品川安治氏と、大切な遺品を当館にご寄贈いただくことを選択して下さった手嶋氏に、改めて深く感謝申し上げます。また、関連資料について貴重な御教示を賜った新妻達雄氏、調査にあたってご高配を賜った北海道大学附属図書館にも、末筆ながら記して感謝申し上げます。

参考文献

- 伊藤逸平 1975. 日本写真発達史. 朝日ソノラマ.
 宇仁義和 2015. ロミン・ヒッチコックが1888年に撮影した北海道と色丹島の写真と旅程. 北海道民族学 11: 57-74.

(12) 「東京本部出品」『写真雑誌』(8) 大日本写真品評会。
 (13) 函館市中央図書館所蔵資料番号: pc002662-0001。

- 大坂 拓 2022. 琴似又一郎の写真について —北海道大学附属図書館所蔵資料の再検討—. 札幌博物場研究会誌 2022: 1-7.
- 大坂 拓 2024. 1876年奥羽巡幸の奉迎に立ったアイヌの姿—「対雁に移る途上、小樽に上陸した樺太アイヌ一行」説の訂正—. 札幌博物場研究会誌 2024: 1-21.
- 大坂 拓 2025. 写真が語るアイヌの近代. 新泉社.
- 大坂 拓・小川正人 2020. アイヌ文化展示施設「エカシケンル」関連の新資料 —2019年度新収蔵資料の紹介—. 北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要 5: 199-222.
- 小川正人・大坂 拓 2018. 釧路市・清野写真館旧蔵写真—2017年度新収蔵資料の紹介—. 北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要 3: 139-148.
- 金田一京助 1933. アイヌ文学. 河出書房.
- 金田一京助 1944. アイヌの研究(改訂三版). 八州書房.
- 瀬川光行編 1900. 日本之名勝. 史伝編纂所.
- 高倉新一郎 1953. 蝦夷風俗画に就て. 北方文化研究報告 8: 1-67.
- 中村絵美 2025. 日本写真史の内と外におけるアイヌ民族の表象. 第38回北方民族文化シンポジウム網走 報告書 映像と北方諸民族: 11-18.
- 室蘭市史編さん委員会編 1989. 新室蘭市史 第五巻 絵図写真. 室蘭市.
- 森岡健治 2021. 『日本のアイヌ』の映像について. ピクチャレスク・ジャパン—世界が見た明治の日本—: 1-5.

On Kajima Seizaburō's *The Ainu of Japan*: Including Introduction of Objects Entering Museum Collection during 2025 Fiscal Year

OSAKA Taku and OGAWA Masahito

This paper introduces the photographic album *The Ainu of Japan*, which was donated to the Hokkaido Museum in fiscal year 2025.

The volume is widely known as one of the earliest photographic albums to focus on the Ainu. A comparison of the newly donated copy with the well-known copy held by the Hokkaido University Library reveals that the contents of both copies are entirely identical. While the cover of the donated copy shows some damage and the binding cords have deteriorated, the overall state of preservation is relatively good. In particular, the photographic plates are well preserved.

Previous studies have suggested that the photographs included in this volume depict Ainu from Biratori in the Hidaka region, as well as Sakhalin Ainu who were forcibly relocated by the Hokkaido Development Commission (Kaitakushi) to the lower

reaches of the Ishikari River near Sapporo. However, no clear evidence has been presented to support these claims, nor had the shooting locations of individual photographs been specifically identified. To address this, the authors of this paper have examined all 22 photographs included in the volume, demonstrating that the shooting locations can be identified for 19 photographs in total: 10 taken in Biratori Village, Saru District, eight in Ishikari District, and one in Muroran District, while the shooting locations of the remaining three photographs could not be determined.

Regarding the photographer, it is not unlikely that the photographs were taken by Kajima Seizaburō himself; however, determining the photographer and dates of photography remains a task for future research.